8月10日東京新聞『こちら特報部』

東電→東北電に最大200万キロワット融通

やはり電力余ってた

熱い夏が盛りを迎えた。だが、あれほど電力の危機を訴えた東京電力は余裕の構え。水害などで電力が逼迫する東北電力へ最大二百万キロワットを融通するという。電力会社間の融通で事が足りるのならば、利用者には何の不自由もない。しかも東電の稼働中の原発は三基に減ったのに、この余力。やはり原発など必要ないのでは。

（中山洋子）

アロハシャツ姿で節電を訴えた江田五月環境相。国を挙げての努力は何のためだったのか＝7月27日、環境省で

東北電力によると、九日の最大使用電力は十四時台で千二百四十七万キロワットに達し、今夏の最大値を更新した。供給力は千三百三万キロワットで、使用率は95・7％。しかも東電が融通した百四十万キロワットを含んでの数字で、ぎりぎりの状態だったのは間違いない。このために東電は九日、融通の上限をさらに引き上げ、最大二百万キロワットまで送る準備も始めた。

東北の電力不足は、七月末の豪雨で、福島県と新潟県の水力発電所が被災した影響が大きい。計二十九カ所が浸水などの被害にあい、百万キロワット前後が供給できなくなっているが「復旧のめどは立っていない」（東北電力東京支社）。

八月は全国から観光客が殺到する夏祭りシーズンで、気温の上昇も追い打ちとなった。例えば、使用率が96・6％に達した八日は、仙台七夕祭り最終日で、宮城県代表の古川工業高の試合が重なり、テレビ視聴率もはねあがった。

それでも東北電力は、計画停電を原則として実施しない方針。自信を支えるのが「東京電力からの融通」だ。

東京電力も、同じ15％の電力使用制限令で支えられている。なのに、なぜ助ける側に回れるのか。

東電の場合、九日の最大使用量は四千八百二十四万キロワットで、五千四百六十万キロワットの供給力に対し使用率は88・4％。「でんき予報」が「たいへん厳しい」と予測する十日の最大量予測も四千九百八十万キロワット。使用率は91・0％の見通しだ。

六日から柏崎刈羽原発の1号機は定期点検に入り、運転を停止している。東電の原発十七基のうち稼働中の原発は同じく柏崎刈羽の5、6、7号機のみ。この状態でも相当の余力を残している。あの電力危機キャンペーンは何だったのか。

東電の広報担当者は「節電の協力もいただき、当初考えていたよりも低くなっている。だが、いつ不測の事態となるか分からない」と強調する。

しかし例年、電力使用量は十二日ごろから、全国的にぐっと下がる。企業がお盆休みに入るためだ。休みが明けるころには秋風が吹き始める。

環境エネルギー政策研究所の飯田哲也所長は「東電が計画停電なしで夏を乗り越えることができるのは、四月の段階で分かっていた。この先、原発が順次運転を停止しても問題がないのは織り込み済み」と話す。東北電力の〝危機〟についても「東京電力が十分に融通できる」とした。

経済ジャーナリストの荻原博子氏も「当初は揚水発電の電力を隠してまで、夏の電力危機をあおっていたのに、どれだけ余力があるのか」とあきれる。一方で「あの手この手の電力不足キャンペーンには警戒しなければならないが、消費者はこのまま節電を続ける方がいい」とも助言する。

それでも節電 そのココロは「料金が上がるから」

そのココロは―。

「原子力損害賠償支援機構法が成立し、事故の賠償金の一部が電気料金に上乗せされる。火力発電所の燃料代なども上乗せされ、電気料金が大変なことになるから」

なにやらブラックジョークのようなオチだ。